

3 犠牲となられた方々

3.1 犠牲者数

犠牲者数は、市内での遺体確認数、死亡届の受理数、被災に関連した犠牲者数などの組み合わせの考え方により異なる。

犠牲者区分		釜石市民の 犠牲者数	釜石市内の 遺体確認数	未来館展示 の犠牲者数
直接死者	釜石 市内 で遺体が収容された釜石市民	775	775	775
	釜石 市外 で遺体が収容された釜石市民	31		
	釜石市内で遺体が収容された 釜石市民以外		108	
行方不明者		152		152
関連死認定者		106		
身元不明者			5	
合計		1,064	888	927

※令和6年1月1日現在

いのちをつなぐ未来館の展示では、「東日本大震災の発災当日に、釜石市の各地区でどれだけの津波被害があったのか」を伝えることを目的とし、以下のとおり集計した人数を記載しています。

- ・釜石市内で遺体が収容された釜石市民 **775** 名
- ・行方不明者 **152** 名 … 合計 **927** 名



【地区別集計表 ※世帯数、人口は平成23年2月現在の住民基本台帳に基づく】

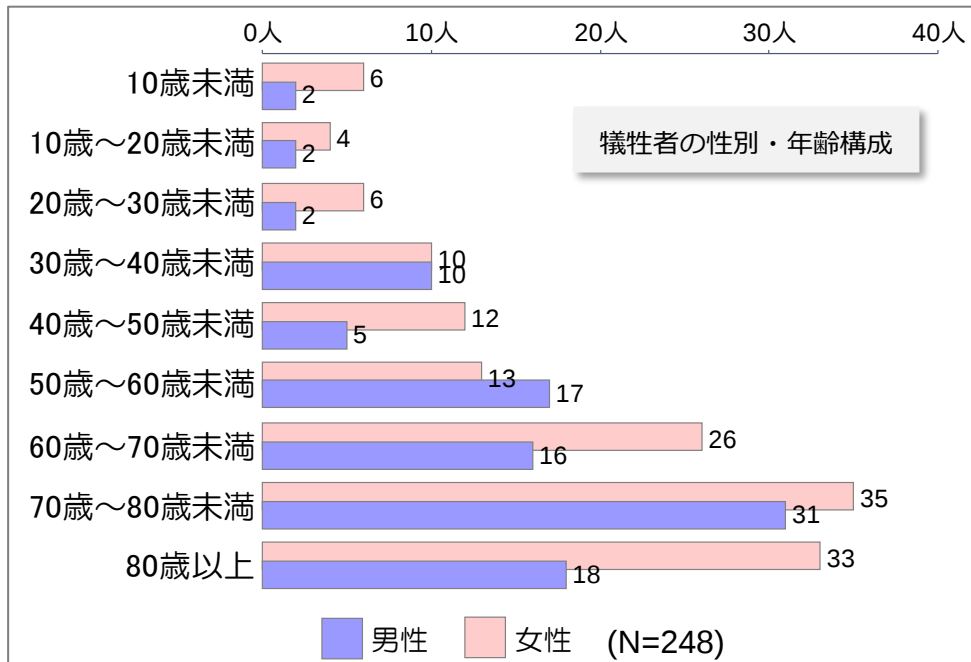
地域名		世帯数	人口	直接死者数	行方不明者数	関連死者数
釜 石	新浜町	103	205	10	4	1
	東前町	187	394	14	1	1
	魚河岸	1	1			
	浜 町	447	940	35	2	4
	港 町	57	129	6	1	1
	只越町	341	704	47	1	3
	天神町	119	258	3		
	大只越町	388	825			3
	大 町	287	574	20		2
	大渡町	282	594	11	1	4
	鈴子町	52	92			
	駒木町	61	123	2		
	松原町	230	454	23		1
	嬉石町	402	856	39	6	4
	合 計	2,957	6,149	210	16	24

地域名		世帯数	人口	直接死者数	行方不明者数	関連死者数
平 田	大平町	379	822	4		
	平 田	1,389	3,410	21	2	17
	尾崎白浜	124	340	2		1
	佐 須	26	98			
	合 計	1,918	4,670	27	2	18
中 妻	千島町	151	296	4		2
	中妻町	934	2,001	12	2	4
	八雲町	163	337	1		
	上中島町	400	964	3		1
	源太沢町	291	628	2		1
	住吉町	57	118	1		
	新 町	173	374	1		
	礼ヶ口町	63	138	2		
	合 計	2,232	4,856	26	2	8
甲 子	甲子町	2,628	6,006	12	2	9
	川目(鍋倉)	5	8			
	合 計	2,633	6,014	12	2	9
小佐野	野田町	1,262	2,691	11	1	2
	定内町	748	1,579	5		2
	甲子町	462	999	1		
	小佐野町	484	1,043	2		1
	小川町	814	1,792	8	1	2
	桜木町	107	204	1	1	
	合 計	3,877	8,308	28	3	7
鵜住居	鵜住居町	1,459	3,601	319	49	11
	根 浜	67	173	14	2	1
	両石町	292	675	27	18	5
	片岸町	275	662	26	7	3
	室 浜	78	197	13	8	1
	箱 崎	273	734	50	14	3
	箱崎白浜	133	387	24	16	1
	仮 宿	28	80	2	5	2
	桑ノ浜	52	121	3	3	
	合 計	2,657	6,630	478	122	27
栗 橋	橋野町	230	505	3	2	
	栗林町	252	758	3	1	4
	合 計	482	1,263	6	3	4
唐 丹	花露辺	71	211	1		2
	本 郷	17	52			
	大曾根	158	398	3		3
	桜 峠	15	38			
	小白浜	224	548	4		1
	片 岸	104	288	8		1
	川 目	30	80	1		
	山 谷	9	27			
	荒 川	125	342	2	2	2
	向	31	80			
	大 石	20	38			
	屋 形	1	4			
	合 計	805	2,106	19	2	9
総 計		17,561	39,996	806	152	106

※すべての犠牲者を震災当時の住民基本台帳に基づく住所地ごとに集計

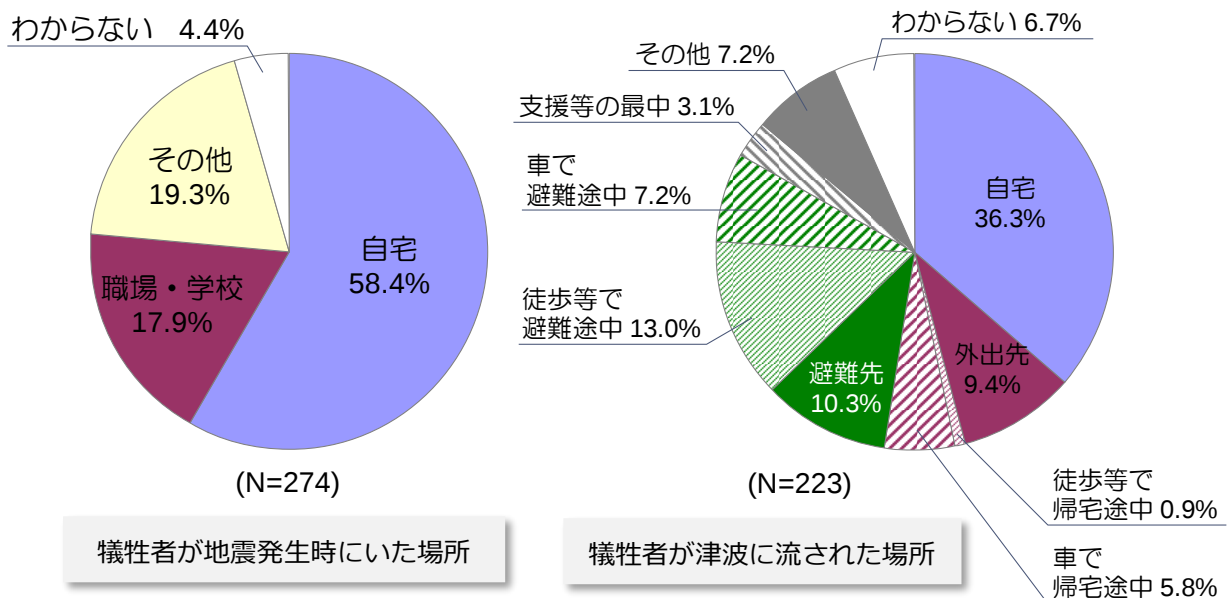
3.2 地区別・年齢の特徴

■犠牲者の6割以上が60歳以上であった。



■犠牲者の約6割は地震発生時に自宅にいた。

犠牲者が津波に流された場所は、約36%が自宅、約20%が避難途中、約10%が避難先



■約17%の世帯では、犠牲者が津波に流された際に同居家族（生存者）の誰かが一緒にいた。

■「片岸・鶴住居・両石地区」では約13%、「釜石湾沿岸：北」では約10%の世帯で、同居家族が犠牲となった。

3.3 なぜ多くの犠牲者が出たのか

■遺族や地域の方から得られた証言

- 自宅に留まり避難が遅れ、流されて亡くなった。
- 数度の避難の呼びかけにも応じず、自宅に留まり亡くなった。
- いったんは自宅の上層階に避難したが、階下に下り、流されて亡くなった。
- 地震のあとに片付けに手間取り、流されて亡くなった。
- 外出中の家族の帰りを待っていて、流されて亡くなった。

■避難を促すための「想定」だったハザードマップを、「安心」マップと理解していた人もいた。

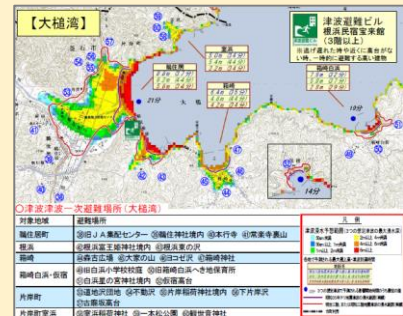
ハザードマップの浸水想定区域よりも外側で、多くの犠牲者が出た。

「ここまで津波は来ない」と思い込み、避難せずに自宅ごと流された人がいた。

【用語】ハザードマップ（津波浸水予測図）（Hazard Map）

明治三陸地震津波・昭和三陸地震津波・想定宮城県沖地震津波の3つの津波を比較して、最も浸水域の広い津波の浸水高さや到達予想時間を地図上に表現したもの。

想定条件で作成されたものであり、より大きな津波も起こり得るということが十分周知されていなかった。



【用語】津波注意報（Tsunami Advisory）

発表基準：予想される津波の高さが高いところで0.2m以上、1m以下の場合であって、津波による災害のおそれがある場合。

発表される津波の高さ：1m（0.2m≦予想高さ≦1m）

【用語】津波警報（Tsunami Warning）

発表基準：予想される津波の高さが高いところで1mを超え、3m以下の場合。

発表される津波の高さ：3m（1m<予想高さ≦3m）

【用語】大津波警報（Major Tsunami Warning）

発表基準：予想される津波の高さが高いところで3mを超える場合。

発表される津波の高さ：5m（3m<予想高さ≦5m）、10m（5m<予想高さ≦10m）

10m超（10m<予想高さ）

※東日本大震災後、平成25年3月に改善された津波警報の内容



（資料）国土交通省気象庁

4 避難の行動

4.1 命を守るための行動（釜石市教訓集から）

○ 揺れたら、ただちに高台へ避難

- 津波は、「車をものすごいスピードで流し、泥水とガレキが押し寄せてきた。」
人が走って逃げきれものではなかった。

○ 避難は「徒歩」が原則

- 多くの人が車で避難を開始したため、渋滞が発生した場合もあった。
浸水が想定される区域で運転中の場合は、車にカギを付けたまま高台に徒歩で避難する。

○ 逃げるときは「声かけ」しながら

- 避難場所や避難の手段に不安がある場合、あえて避難することなく、その場に留まる人がいた。
自分にとって都合の悪い状況・情報をもたらされたとき、その危険性を過小評価してしまう人間の特性（偏見の正常化）がある。避難するときは、避難を促す強い働きかけが必要である。

○ 避難したら絶対に戻らない

- 地震の直後、一度は高台などに避難しながら、何らかの理由で自宅に戻り、被災または避難が遅れた人がいた。

○ 「命てんでんこ」で行動する。

- 「互いを信頼」して、それぞれが逃げる。

震災前、子どもたちの防災教育と同時に、保護者に対しても「子どもを信じて親も避難を」と伝えてきた。子どもは親を信じて、親も子どもを信じて、逃げることができた。

- 自分が逃げることで「他人の避難を促す」知恵でもある。

子どもたちが避難する様子を見て、地域の人たちも避難した場合はあった。



【用語】てんでんこ（Tendenko : Each/Individually - Let Each Look Out For Themselves）

「それぞれに」「めいめいに」を意味する方言。

津波避難の標語に転化したのは明治三陸地震津波の頃からと言われている。釜石では「命てんでんこ」の呼び名で、一家や地域の全滅を避けるため「自分の命は自分で守る」という教えとして伝えられてきた。



4.2 鵜住居地区防災センターのできごと

■震災当日、多くの住民が避難し、160 名を超す方々が犠牲になったと推計している。

区 分	人 数
1 鵜住居地区防災センター内で遺体で収容された死亡者	69
2 鵜住居地区防災センターに避難した可能性のある死亡者 (家族などととも避難した状況などによる)	25
3 鵜住居地区防災センターに避難した可能性のある行方不明者	30
4 鵜住居地区防災センターに避難した可能性のある死亡者 (センター周辺に居住していた状況などによる)	38
5 鵜住居地区防災センターに避難した避難者の中の生存者	34
合 計 (平成 28 年 3 月 24 日時点)	196

※常楽寺付近から鵜住神社付近までを対象範囲とする検証作業に基づく推計



■津波災害の避難場所ではなかったが、施設の名称を「防災センター」としていたことで、津波災害の避難場所であるとの誤解が生じていた。

■震災前に、地域でこの施設を利用した津波避難訓練が行われていたことなどから、一部の住民の間に、津波災害の避難場所であるとの思い込みが生じていた。

【用語】緊急避難場所 (Emergency Evacuation Area)

災害が発生、または発生する恐れがある場合、その危険から逃れるために一時的に避難し身の安全を確保する場所。災害の種類ごとに、安全を確保できる場所が指定されている。

【用語】拠点避難所 (Evacuation Shelter)

大規模な災害が発生し、住宅に危険が予想される場合や住宅が損壊した場合など、生活の場が失われた場合に、一時的な生活の本拠地として滞在する、中・短期にわたる避難生活を前提とした避難所。



4.3 子どもたちの避難行動

■震災当時、市内には2,926名の児童生徒がいたが、多くの子どもたちが素早い避難により津波から逃れることができた。

【事例】釜石小学校

地震発生当時、学年末の短縮授業日で全校児童184名のうち大多数の児童はすでに下校していたが、下校時津波避難訓練などで実践していたとおり、自らの判断で適切に避難を行い、全校児童が自らの命を守った。



【事例】釜石東中学校・鵜住居小学校

地震発生後、中学生が率先避難者となって避難を行い、その様子を見た小学校児童や地域の大人たちなどの避難行動を促し、総勢約600人が高台を目指して避難を行った。

鵜住居保育園の園児の避難を手助けするなど、子どもたちは「助けられる人から助ける人へ」を実践した。



(撮影・提供) 高村幸男氏

■震災前から津波防災教育を核にした「命の教育」に取り組んでいた。

学校で既に行われている授業の中で、防災教育が行われるよう、(市、市教育委員会、群馬大学災害社会工学研究室が共同で作成した『釜石市津波防災教育のための手引き』に基づき)子どもの発達段階に応じたカリキュラムが工夫されていた。

この教育では、「津波から命を守る避難三原則」が掲げられていた。

【津波避難三原則】

○ 想定にとらわれるな

津波による浸水被害を予測したハザードマップは、あくまでも想定にすぎない。

○ その状況下において 最善を尽くせ

自分の命を守るために、そのとき自分ができる最善のことをする。

○ 率先避難者たれ

周りの人がどうであろうと、まず自分自身が真っ先に避難する。

4.4 「釜石の出来事（奇跡）」

「釜石の出来事（奇跡）」に対する市の考え方

「釜石市の小中学生のほとんどが津波から避難をして助かることができたこと」について、報道機関などでは「釜石の奇跡」として表現される場合があります。

市では、これまで積み重ねてきた防災教育が実を結んだ結果であること、また、一方では犠牲となられた方もいることを踏まえ、「釜石の奇跡」という表現は使わないこととし、「釜石の出来事」と表現しています。

■東日本大震災では、多くの児童生徒が津波から逃れることができた一方で、震災の当日、学校や幼稚園などを休んでいたり、避難の途中で保護者に引渡したりした 12 名が犠牲となっている。

■教職員も犠牲となっている。

幼稚園職員 3 名死亡、幼稚園職員 1 名・小学校職員 1 名が行方不明（平成 28 年 3 月末現在）

4.5 避難行動を「文化」へ

■一番大切なのは、避難行動や備えを「実践し続ける」こと

「揺れたら、ただちに高台へ避難する」ということを何度も繰り返し続ける。

次の世代にとっては、それが「当たり前の行動」になり、生活の中に深く浸透、定着する。

